

「秋田大学学生海外派遣支援事業」帰国報告書

平成 21 年 2 月 10 日

所属：教育文化学部国際言語文化課程欧米文化選修 4 年

氏名：疋嶋 かおり

派遣先大学名：アメリカ合衆国 セントクラウド州立大学

在籍身分：交換留学生(文部科学省短期留学推進制度(派遣))

派遣期間：約 9 ヶ月(アメリカにおける学年暦の 1 年)

渡航年月日：平成 19 年 8 月 23 日

帰国年月日：平成 20 年 5 月 22 日

アメリカ留学を振り返って

疋嶋 かおり

はじめに

アメリカのセントクラウド州立大学に留学し、多くの人と出会い、様々なことを学んだ。ここでは留学中の勉学、生活の様子をまとめ、さらに留学を通して学んだことを示す。

1. 勉学

1.1 留学中の学習について

私は英語教育と言語学の授業を中心に受講した。いくつか授業内容を紹介する。

例えば、**TESL Methods: Reading / Writing** では、第二言語学習、もしくは、外国語学習の場において、リーディングとライティングを効果的に教えるための様々な方法を学んだ。予習段階でテキストの指定された範囲を読み、それをもとにクラスではディスカッションを行う。どの指導方法が絶対、と決めつけるのではない。ディスカッションを通して、指導方法を深く考察するのである。授業で取り扱った指導方法を用いて授業案を作成し、学期末にはクラスメイトとその授業案に基づいて模擬授業を行った。

言語学の授業の1つ、**Introduction to Linguistics** は、秋田大学でよく行われている講義スタイルと似ているが、違う点は予習・復習の量が非常に多いことと、授業のスピードが早いことである。それは、膨大な言語学の領域を一通りカバーするためである。英語学科の中で最も厳しいクラスである、と有名だった。中間テストで、過去最高平均点をマークした私たち学生に対し、教授は喜び、学期末にはもっと難しいテストをプレゼントすると断言した。すると、学生たちは自主的に勉強会を開くようになった。わからないところを互いに教え合うのである。

American English では、アメリカで使われている英語について、社会言語学の観点から学んだ。授業時間外には、クラスメイトとのペアワークにも取り組んだ。学期末に研究内容を発表し、またレポートも提出した。

上に挙げた授業も、それ以外の授業も共通していることがある。それは、他の学生とのやりとりが非常に多いということである。授業時間内ではディスカッションという形で見られるし、授業時間外にもグループプレゼンテーションの用意や、勉強会などがある。教



大学図書館。情報処理センターと図書館が一体化している。

授の講義を聞くだけでなく、学生同士が意見交換をして学ぶ機会が非常に多い。

また、授業時間外の勉強を大事にしている。授業数は少なく、空き時間が多く見えるが、受講している授業の予習・復習を十分に行うために、絶対に必要な勉強時間である。予習の段階でテキストを読んでいなければ、授業でのディスカッションには参加できない。また American Sign Language では、毎週異なるクラスメイトと、様々なペアワークが課されていた。授業のみ出席していれば良い、という授業は皆無で、予習・授業・復習というパターンが当然である、と教授も学生も認識している。

1.2 秋田大学での卒論

留学後に取り組んだ卒論では、手話について研究した。きっかけは留学中の American Sign Language の授業にある。授業ではアメリカ手話の使い方を学び、授業時間外では上で述べたように、ペアワークを通して、手話の様々な側面について学んだ。このペアワークで、アメリカ人学生は手話に対する基本的な知識をもっていることを実感した。高校で第二言語として学んできた学生が多いからである。しかし、日本を含め他国からの留学生は手話に対してかなり誤解を抱いていると感じた。そのため、手話に対して正しい認識を広めたい、と思い、様々な例を提示することで、手話が言語であることを示した。

さらに両大学で学んだ言語学の知識をもとに、手話を研究したいと考えていた。卒論の指導教官である星宏人先生や、セントクラウド州立大学の American Sign Language の教授の御指導のもと、アメリカ手話について考察を深めることができた。

卒論は英語で書き、また英語で書かれた先行研究を読んだ。特にリーディングは留学中に慣れたこともあり、抵抗なく読み進めることができた。それに比べライティングはまだまだ勉強する必要がある。しかし、留学中に培った忍耐力で、何度も辞書を開きつつ、書き上げることができた。

2. 留学中の生活

授業以外の時間は、上で述べたように、予習・復習をしていることがほとんどだった。皆成績に非常にこだわるので、必死に勉強している。学食で友人と交わす会話が、唯一の楽しいひと時だったという日も少なくはない。

皆がしばし勉学を忘れられるのが、1週間の授業を終えた金曜日の夜である。月に1回、After dark というイベントが催され、様々なアクティビティが用意されている。新しく友達ができる機会でもある。

大学には留学生が80カ国以上から来ている。それぞれの国の文化を紹介するイベントが週末に開かれる。たとえば日本の場合、太鼓の演奏や踊りなどを披露し、日本食を食べて



アメフトチームの試合風景

もらうイベントを催した。様々な国のイベントに参加することで、アメリカにいながら、他国の文化を学ぶ良い機会になった。

他にも大学のアメフトチームの試合観戦など、様々なイベントが用意されている。その中でも特に変わっていたのが、学食で開かれたステーキディナーという「晩餐会」である。それは成績優秀者のみが招待される。学食のエントランスには、普段の入り口に加え特別入り口が設けられ、成績優秀者は堂々とそこから入っていく。アメリカでは簡単に A をとれる、という授業はまずない。本当にどれだけ頑張ったかによって細かく成績が付けられる。良い成績は誇るべきことなのだ。私も参加できて、非常に嬉しかった。

3. 留学を通して学んだこと

まず、留学前の準備段階から振り返りたい。留学前の諸準備は非常に大変だった。例えば、留学のために TOEFL を受ける必要があるが、私がこのテストを受け始めた頃、ちょうど現行の TOEFLiBT が運用され始めた。運営会社のホームページを見ても情報が不十分で、試験予約が全国から殺到し、試験を受ける機会を得ることすら難しかった。後に国際教養大学でも受けられるようになったが、最初は試験会場が東京のみであったため、高い試験代に加え、交通費もかかった。しかし、TOEFLiBT の勉強を通して英語力がついたことは確かである。

次に、留学を通して学んだことを 2 点挙げたい。1 点目は英語に関することである。英語力は確かにアップしたと感じる。それ以上の収穫は、今後どのように英語と向き合っていくか、指針を立てられたことである。

留学前は英語といえば勉強すべき科目、というイメージだった。しかし、実際に英語を使い、様々な国や地域から来ている人と交流する楽しさを知って、英語は世界とつながるための道具である、と気づいた。

道具であるから、使わなければ使い方を忘れてしまう。つまり、英語を使わなければ、次第に忘れてしまう。しかし、道具をいつでも使えるように準備することもできるし、さらには、その道具をグレードアップさせることもできる。すなわち、英語をいつでも使えるようにすることも、さらに英語をレベルアップさせることもできる。そのためには、常に英語に触れることが必要だ。私が英語教育の授業で学んだことを、自分の英語学習に応用して、今後も更に英語の力を伸ばしたい。そして、英語で交流できる機会を見つけて楽しみたい、と考えている。

2 点目は、世界に対して興味をもつようになったことである。それは、文化のバックグラウンドが異なる人々との生活で自然に生まれた。

例えば、日本で生活するためには日本語が



大学の様子。左手には三大宗教の共生を掲げたボードが見える。この他にも、個々の文化を大切にするというメッセージをよく見かけた。

話せれば問題ない。よって、英語などの外国語を話せると、特別な能力をもっているように見える。しかし他の国では、異なる民族の人々が 1 つの国に住んでいて、意思疎通するために、母国語プラス英語などの共通語を話す。話せる言語が 2 種、3 種あるということはいごく普通である。また、そのような多民族国家では、大学の授業はすべて英語で行われているようである。渡米して 2 日目、隣に住んでいたネパール人に「どうしてそんなに英語が話せないのか」と聞かれた時のことは今も忘れられない。

当然だと信じ込んでいたことは当然ではない。常に他の国ではどうなのだろう、と考える習慣がついた。ニュースも、国内だけではなく、海外のニュースもチェックするようになった。このように視野が広がったと感じる。

これら学んだことは、異文化の中で生活したからこそ、生まれてきたものである。留学しなければ、英語を使う、という楽しさにはなかなか気づかなかっただろう。秋田では異文化に触れることが多くないから、自国や他国の文化について考えることも、世界に興味をもつこともなかつただろう。留学を通して、成長できたのではないか、と思う。

留学の全日程は終了した。しかし、留学が価値あるものだったと締めくくるのはまだ早い。すなわち、留学中に学んだことをこれから活かしていくことで、さらに留学の価値は高まると思われる。